

週刊

GAINAX総監修ビジュアル・ガイドブック

新訂版

EVANGELION

CHRONICLE

エヴァンゲリオン・クロニクル

11

定価 **690**円(税込)

2010/4/20



Mechanic Sheet

第5使徒ラミエル

国連軍兵器

Character Sheet

渚カヲル

その他の人々

Tactics Sheet

3号機起動実験

Timeline Sheet

瞬間、心、重ねて

Installation Sheet

葛城調査隊

Technology Sheet

S機関

Extra Sheet

用語辞典／企画書／トピックス



特製バインダー
発売中!

DEAGOSTINI

株式会社 deagostini.jp

第5使徒

ラミエル



UNKNOWN

FIFTH ANGEL

RAMIEL

絶大な火力と
鉄壁の防御を誇る
要塞のごとき使徒

Illustration by Hirofumi Ichikawa

攻防兼ね備えた 正八面体の使徒

使徒の姿は同一ではなく、生物らしからぬ形状を持つものも少なくない。中でもラミエルはプリズムのごとき多面体であり、有機物とは真逆の姿を持つ。その無機質な外見に沿うがごとく、システムチックな行動原理を有す使徒である。

個々の敵に対しては長射程かつ高威力の加粒子砲によって近接戦闘を封じ、目的のNERV本部へはシールドによる穿孔で侵入を目論むという、まるでNERV攻略のための能力を備えて誕生したかのような特徴を持つことから、使徒間では過去の戦闘記録の蓄積のようなものが存在するとも考えられよう。

第3新東京市に襲来したラミエルはEVA初号機を撃破。都市中央にて停止し、シールド穿孔によるNERV本部への直接侵入を試みるも、復帰した初号機の長大距離射撃を受けて殲滅された。

ユダヤ、キリスト教神秘主義において別名ラミエルともいわれ、幻影を統括し、復活を待つ魂の王だという。また、ミルトンの「失楽園」では雷を操る堕天使として描かれている。強力無比な加粒子砲は、雷を司る天使の名にふさわしい力であろう。

加粒子砲という、使徒の中でも最大級の攻撃力を有しているラミエル。A.T.フィールドの防御力と相まって要塞のごとき威容を誇る。



上面

TOP



ラミエルの目的はジオフロントにあるNERV本部への直接攻撃であり、そのため地下を掘り進み掘削シールドを備えていた。



原形を残したまま活動を停止したため、第4使徒シャムシエルと同様に使徒解析の貴重なサンプルとなったと思われるラミエル。

DATA

呼称：5th ANGEL

第5使徒

天使名：RAMIEL

ラミエル

象徴：SYMBOL

雷

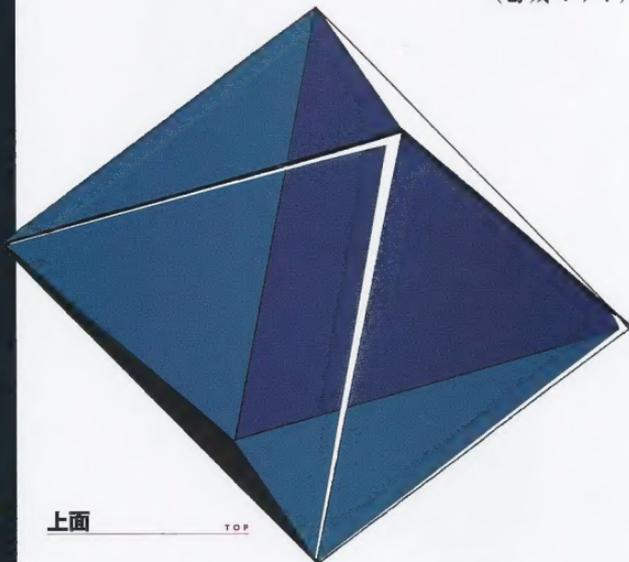
能力：ABILITY

加粒子砲

掘削シールド

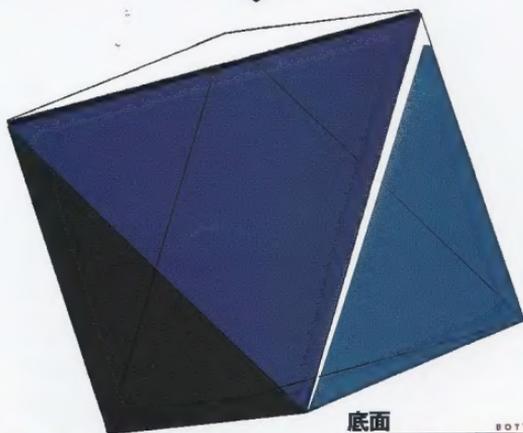
攻守共にパーペキ。 まさに空中要塞ね

(葛城ミサト)



上面

TOP



底面

BOTTOM

関連事項 RELATED MATTER

- EVA専用熱光線防弾兵器
- ボイドコンスナイパーライフル
- ヤシマ作戦
- EVA零号機
- 使徒



加粒子砲の防衛手段として、SSTOの底部を流用して製造された雷。EVA零号機が使用し、身を指して初号機を守った。

ラミエルの体構造

一辺が約150~200mの正八面体で構成されるラミエル。第3、第4の使徒とは異なり、コアが体内に隠されている。生命体でありながら結晶構造を持つ鉱物の外見から、A.G.ケアンズ=スミスが唱える鉱物結晶生物という結晶遺伝子説も連想されるが詳細は不明。



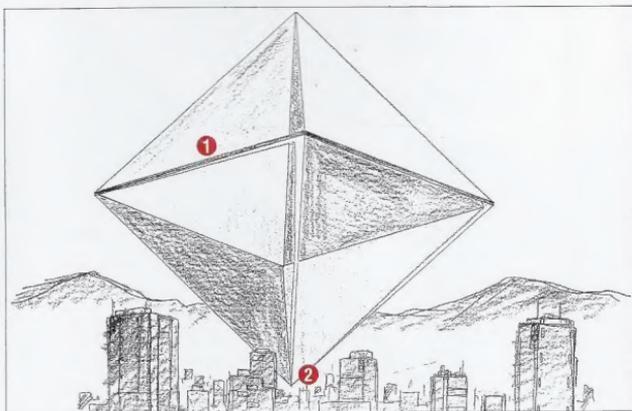
プリズムのようなラミエルの体表面。加粒子砲が照射される箇所、荷電粒子を加速して収束しているための副次的現象として、表面が輝くように発光する。

1 加粒子砲

荷電粒子を加速、収束させることで熱転換エネルギーを生み出し、対象に照射する兵器。本体中央のスリット部分が粒子加速器の役割を果たしていると思われる。多数の威力でEVAの第3新東京市まで融解させるほどの、一撃必殺の威力を持つ。



↑加粒子砲を受けた初号機内部



2 底部の掘削用シールド

底部から伸びる直径17.5mの掘削筒。これを用いてジオフロント内にあるNERV本部への侵入を図る。ただし、侵入後、どのような方法で攻撃を仕掛けようとしたのかは不明。



シールドでジオフロント侵入を試みるラミエル。NERV本部ビルから天井まで0.9kmあり、その半ばまで到達したシールドの長さばかりのものと推測される。

↓シールド先端部



↑シールドには線状の掘削ベルトが2本縦向きに付いている。その先端部には10本以上のビーム状カッターが形成され、この貫通力と回転運動で穿孔。

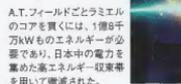
第3新東京市地下にある22層の鉄甲防壁を10時間足らずで突破した。

ラミエルの活動記録

零号機の再起動実験中に襲来したラミエル。迎撃に出撃した初号機を加粒子砲にて退け、NERV本部の直上ゼロエリアにて停止。シールド穿孔により本部への直接侵襲を試みる。その後ジオフロントに到達するが、その際NERVはヤンマ作戦と総たれた長々距離射撃を決行。ラミエルの感知外と推測した二子山からの狙撃だったが、結果的に同使徒の索敵範囲内だったためEVAを感じ、第一射は初号機と同発となるが、ビーム同士干渉して共に的外す。二射目は零号機に防がれ、その間、初号機の二射目によりA.T.フィールドごとコアを撃ち抜かれ轟沈、殲滅された。



ラミエルはEVAを敵だと認識しており、リフトオフ直前に射けない初号機を加粒子砲で強い牽制、近接射撃に持ち込まれるまま先に手を打って撃破する。



A.T.フィールドごとラミエルのコアを貫くには、1億8千万kWものエネルギーが必要であり、日本中の電力を集めた集エネルギー収束帯を用いて殲滅された。

ラミエル侵攻記録

- ラミエル殲滅
- 初号機の2射目が命中
- シールドが宙中
- ジオフロントに到達
- 本部に向けて
- シールド穿孔開始
- 第3新東京市
- ゼロエリアに侵襲
- 第3新東京市に侵入
- 初号機に先制
- 第3新東京市に侵入
- 声ノ湖上空に侵入



特記事項

NERV戦術作戦部の情報分析

対使徒の作戦はNERV戦術作戦部による精密な情報分析のもと立案されている。ラミエル殲滅につながったヤンマ作戦も、甚微一劃のアイデアだけでなく、様々な武器や人材を駆使した分析の賜物であろう。



使徒への対策を練るための分析室。作戦室のスタッフにより、入手した情報から使徒の性質等を的確に分析し、現状における最適な対使徒戦術を編み出すための機器が揃う。



使徒を分析するために様々な機器を装備、運用する作戦室。通常の攻撃兵器のほか、EVAの専身大バールン・ダムイ一等の情報収集専用の機器をも備え、分析に役立っている模様。



ラミエルのA.T.フィールドは内蔵でも確認できるほど物質化した強力なものも判明。そこから1億8千万kWという使徒を撃破可能なエネルギー量を算出している。

キャラクターシート

Character Sheet

渚カヲル

Sheet

18

KAWORU NAGISA



碇シンジに
好意を寄せる



NERV



5th Children

渚カヲル

KAWORU NAGISA

謎多き
5人目の少年



個人情報

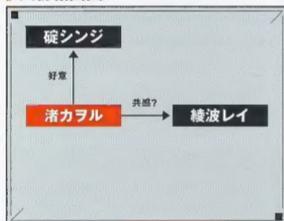
名前	渚カヲル
年齢	15歳
国籍	不明
生年月日	A.D.2000/09/13
血液型	不明
所属	NERV

シンクロ率の著しい低下によりEVA試作機を起動させることが不可能となったセカンドチルドレン、惣流・アスカ・ラングレーに代わるEVA操縦適格者として、人類補完委員会より直接的にNERVへと配属されたフィアスチルドレン、それが渚カヲルである。その過去の経歴はすべてが抹消済み(ただし、生年月日はセカンドインパクトと同日とされている)であり、人類補完委員会直属の諜報機関マルドゥック機関より提出された報告書においても、その存在は完全に非公認とされていたようである。

EVAの操縦適格者であるからには、碇シンジらと同年代の少年であるはずのカヲルだが、その性質は年齢を感じさせない超然としたものである。社交性に富みながらも、彼の言葉は難解なものも多く、14歳の少年であるシンジを困惑させていた。それもそのはずで、カヲルはただのヒトの少年ではなく、その正体は第17使徒タブリスであった。

使徒としての使命を果たすべく、カヲルはEVA試作機を伴いセントラルドグマを降下。さらにターミナルドグマへの侵入を成功させ、「アダム」との接触を図った。しかし、そこに在ったのはアダムではなく「リリス」であると看破したカヲルは接触を中止、その後ターミナルドグマ内でEVA初号機により扼殺された。これは、自らの死を彼自身が願ったためであり、生と死は彼にとって等価なものであった。なおタブリスは、伝承の中では「自由意志」を司る天使であるとされている。カヲルの死も、彼が自由意志より選択した道だったといえるだろう。

人物相関図



関連事項

- 碇シンジ
- 綾波レイ
- ゼレ
- 第17使徒タブリス



使徒との戦いにより傷重となく昏倒に陥りながら、選ばれることなくEVA初号機を操縦し壊れているリードチルドレン。

表情 / 服装



レイとの類似性を感じさせる、赤い瞳とアッシュグレイの髪を持つカヲル。彼女と同じく、特殊な存在であることの確れともいえる。



シンジに視線を向け、優しい微笑を浮かべるカヲル。初対面のシンジの警戒心を解くには十分なものだったようだ。



一種やかみ笑みを浮かべていることが多いカヲル。それゆえに、彼がその表情の裏で、いかなる思考を凝縮しているのか読み取ることは困難。



一とでもシンジやアスカらと同年代とは思えない容姿を持ち、どこか超然としたものを感じさせるカヲル。こういった含みのある笑顔も、そのひとつである。



一層悲涼さすら感じさせる、柔らかい微笑を浮かべるカヲル。これもまた、少年らしからぬ表情といえる。



EVA試作機に向かって磨りかけた顔のカヲルの表情は、人間を相手にしたときとまるで変わりのないものだった。



一プラグスーツ姿のカヲル。金体的なカラーリングがダークブルーを基調としているという点以外は、シンジが構築しているものと類似したデザインである。

キャラクターシート

Character Sheet

渚カヲル

KAWORU NAGISA

Sheet

18

渚カヲル

という存在



一瞬かに思いを馳せているかのような表情を浮かべるカヲル。その表情からだけでは、どういった感情を抱いているか推測することは難しい。第17使徒である彼の思考は、ヒトには理解し難いことも多いように思われる。



—シンジと同じ、第3新東京市立新谷中学校の制服に身を包むカヲル。シンジと共に中學生としての日常を送る可能性もあったが、先の使徒戦で学校自体がなくなってしまったため、学校生活を送る姿は見られなかった。

カヲルは使徒の中でも「ヒト」の形を持つという点において、特異な存在である。彼は、自らと同EVA操縦適格者であるシンジとの一次的接触を成功させたが、これはヒトの形を持っていたがゆえに可能であったといえる。NERVを訪れる前に現れた第16使徒アルミスエルが、EVA零号機、ひいてはヒトとの一次的接触を図っていたことなどを考え合わせると、その時点で使徒は人間との接触を望んでいたようである。これは、人間の持つ知恵を求め、という意味を持っていたと考えるのが妥当だろう。

ただカヲルは、使徒の使命という意味合いのみでシンジに近づいた訳ではないとも考えられる。一次的接触を固けるだけならば、好意を表明する必要はないからだ。その狙いは定かではないが、カヲルは「ヒト」らしい接触を図ったと見るべきだろう。接触した結果として好意を寄せ、積極的に交わりを持つとするカヲル。しかし、ヒトとしての彼が取った行動はシンジの心を開けるに十分なものであったがゆえに、結果的には絶望を生み出すこととなる。



シンジに対する素直な好意の言葉と口にするカヲル。それが心から湧き出たものだったからと、シンジをその言葉に心を動かされた。



初めてのシンクロテストながら、カヲルの真価は余韻に満ちていた。しかしそれも、彼の能力を考えれば当然のことといえる。

これまでの操縦適格者たちとは違い、人類補完委員会より直接派遣されたフィスチルドレン、カヲル。その特異な処遇はNERVの面々に疑念を与えた。さらに、配属直後のシンクロテストではコアの変換なしに、シンクロ率が驚異的な高数値を記録。EVAのシステム上有り得ないその事態に、NERVの面々はさらなる疑念を募らせることとなる。なお、その後、カヲルは自らの意志でEVAとのシンクロ率を設定する能力を持っていることが判明したが、それもまた理論上有り得ない事実だった。適格者としての特殊な経緯、そして有り得ない能力から、彼は一部のNERV職員より怪しまれ、その正体が知れることとなる。



第17使徒

としての役割



EVA 2体の死期を目前に、人の意思と希望に思いを馳せるカヲル。管轄者の上を無条件に侵すは、彼のヒトならば存在在らだらう。



ターミナルドグマに陥属された白い巨人を一瞥したカヲルは「そういうことか、リリシ」と呟き、それがリリシであることを認識した。

カヲルはほかの使徒と同様に、第17使徒タブリスとして、ターミナルドグマにあるとされるアダムの接触を図った。使徒の目的は、自らを生み出したアダムに帰帰、融合することであり、その結果サードインパクトが発生するとされている。ただ、カヲルは人類補完委員会（実質的にはゼーレ）の手によりNERVに送り込まれた使徒であり、他の使徒とは異なった存在である。カヲル、そしてその背後にいるゼーレは、人為的サードインパクトの発生を目論んでいたものとも考えられる。しかし、NERVに秘匿されていたものが「アダム」ではなく「リリシ」であったため、その目的は果たされずに終わることとなった。

碓 シンジ

との関係



広い海船に迷ってつづくるカタルと、落ち着かなうように彼の様子もうかがうシンジ。ふたりの別個的な性格がはっきりと表れている。

内面を吐露したシンジにカタルは「僕に会うために生まれてきたのかもしれない」と言う。その表情は、心から嬉しそうに笑顔だった。



第3新東京市を訪れたカタルが、いち早く接触しようとした人間——、それがカタルと同じEVA操縦適格者であり、サードchildレンである碓シンジだった。カタルはシンジと共に入浴し、同じ部屋で就寝した。その間、ふたりはとりとめのない会話を交わし、カタルはシンジのことを「好意に値する」と評している。それは、シンジが初めて受け取った言葉であった。それが大きな契機となり、カタルは周囲に友人と呼べる存在を失ったシンジの内部に深く入り込むこととなる。

しかし、カタルはシンジにとって倒すべき敵——使徒であった。その事実を知り慣れたシンジに、カタルは自らの死を託した。この行為は、自らが好意を寄せたシンジという存在に、自分を消すことでヒトが生きる道を選び取って欲しいと望んだためと見取れる。「君たちには未来が必要だ」というカタルの言葉からも、それを読み取ることができる。しかし、それによりシンジは、好意を寄せられた友人を殺すという残酷な選択を迫られることとなった。



シンジに自らの死を託したカタルは、シンジに伝えて嬉しかったと言う。死の直前まで、彼はシンジに対する好意を少しも失うことはなかった。



一瞥き顔のシンジ。一次的接触を機嫌に避け、他人と距離を合わせることすら好きな「怪」に、カタルは「人間が嫌いなから」という問いを投げかけた。シンジの内面を看破したからこそ発せられた言葉といえるだろう。

一カタルと似たプラグスーツを着用しているシンジ。その印象が違ったものに見えるのは、色調の差に加え、人物の性質の差が外面にも表れているため。



ふたりが言葉を交わしたのはただ一度のみ。レイが発した言葉は、カタルが同者であるかを問うものだったが、彼はそれに答えなかったようである。

死の直前、EVA初号機の準備の妨げを見よげるカタル。微笑を浮かべたその表情は、自らの死後を彼女に託したもののようにも見取れる。



こくずかながら、言葉を交わしている綾波レイとカタル。「君は僕と同じだね」とカタルに語りかけられたレイは、その後「私と同じ感じがする」と告白している。これらが意味するところは、互いに「同じ適格者」というだけにとどまらず「特異な存在」と感じ合っていた、と考えるのが妥当だろう。使徒であるカタルと「同じ」ならば、レイはヒト——カタルが言うところのリリンとは異なった存在であることは間違いない。さらに突き詰めれば、使徒、あるいは人類の始祖たるリスの魂を宿すものであるとも解釈できる。ただ、その真相が明らかになったのは、カタルの死後になってしまった。

綾波レイ

との関係

特記事項

音楽へのこだわりの意味

カタルはシンジと出会った際、歌を口ずさんでいた。ベートーヴェンの交響曲第9番第4楽章、「歓喜の歌」である。その際、カタルは歌というのに対し「リリンの生み出した文化の極み」とであると断言していた。彼のその言葉からは、音楽に対し何らかの特別な思い入れがあるものと推測できる。また、シンジもつねにSDAITを待ち歩き、ひとりでいる時には音楽を聴いていることが多く、幼い頃からチェロを弾き続けてもいる。シンジはカタルと違い、音楽を好むと明言することはないが、やはり相応の思い入れを持っているものと考えた方がいいだろう。そういう意味でも、カタルとシンジには通じ合うものがあったのではないだろうか。



カタルがシンジに最初に投げかけた言葉は、歌というものの良さについて同感を求めるものだった。



「歓喜の歌」を口ずさんでいたカタル。クラシックを好むのであれば、チェロを弾くシンジと通じ合うものがあるのも不思議ではない。

本部施設ゲート前でカタルを持っていた間にも、音楽を聴き続けていたシンジ。そんな彼に、カタルは好意的に語りかける。





国連軍兵器

UN M Mil-55d 輸送用ヘリコプター

国連軍が保有する 輸送戦力



偵察から始まった航空機の軍事利用は自然に物資と人員の空輸にも用いられてゆく。中でもヘリコプターは、車両の入れない山間部や海上などへの輸送に重宝され、海上では物資や兵員輸送の主流となる。

限られた空間で運用可能なVTOL機構を有す重戦闘機が国連軍で制式採用されていることから、複雑な地形で運用できるヘリコプターは、セカンドインパクト後の荒廃した地形には適していたと考えられる。国連という世界最大の組織にあって20世紀の機体が未だ現役の中、限定空間でのみ運用可能な機体为新設計されていることから、Mil-55dは、2015年という時代を反映した航空機のひとつといえるだろう。

型番の「Mil」からロシア製（ミル設計局）の機体だと考えられるもの、背骨型のフレームからシムルスキー社が開発したCH-54スカイクレーンのコンセプトを組み入れたものと思われる。



「ミル」設計局の「Mil」からロシア製（ミル設計局）の機体だと考えられるもの、背骨型のフレームからシムルスキー社が開発したCH-54スカイクレーンのコンセプトを組み入れたものと思われる。



Transport Helicopter

機体性能と運用

6枚のローターブレードによる高い安定性と、搭載量の大きなカーゴベイが特徴。搭載量を増すため燃料を犠牲にしており、長距離輸送には向かないものの、着地面積の限られた艦船への輸送に秀でる。



長距離飛行のため、左右の主翼には燃料補助タンクを2つ装備している。

1 カーゴベイ部分

胴体部分にカーゴベイを抱え込むような機体形状を持つことで、優れた搭載能力を誇る。また、大量輸送など、その時々で任務に合わせて搭載するカーゴベイの種類を変更できると思われ、汎用性の高い輸送能力を持つ。



EVAの非常用電源ソケットを荷として運んできたため、かなり大きなサイズのものを使用している模様。なお、貨物の積み降ろし用カゴアは後部にある。

2 搭乗口

コックピットへの搭乗口は縦首左側の下部にある。そのため縦首上部にあるコックピットまで上がる必要がある。胴体部分にカーゴベイを持つため、機首の底部に設けられ、タラップが地面まで伸びる仕組みとなっている。

→タラップ展開図



3 姿勢制御スラスター

機首方向の変更はスラスターで行なう。これは、ドクターヘリ等で使われるMD900イクスプローラーに用いられているノーターシステムの改良（もしくは進化）型と推測される。



ノーターシステムは正副乗員の機首によりターボトルクを打ち出すので、ターボローターに比べ操作性や整備性が向上し、騒音も低い。形状は似ているが、形状確認のものと同様に音が不明。

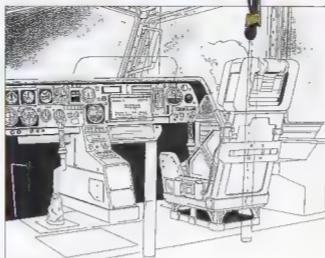
4 コックピット

正副乗りの操縦手が並ぶ操縦席のほか、乗員用に3人分の座席を持つ。なお、搭乗口へ通じる後部は、ほぼ完全に防衛射撃カバーがかけられ安全性が保たれている。

- 連続機動
- 国連軍太平洋艦隊
- 回避

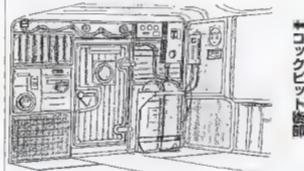
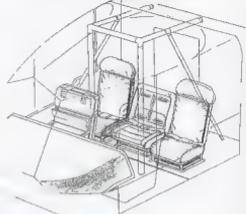


国連軍の主力戦闘機。狭い場所でも機動可能というVTOL機により、ヘリコプターの利点を兼ねた戦闘機である。



←前部コンソールパネル

↓コックピット内座席配置図



↑後部コンソールパネル



機首を向かえ5人が搭乗可能。7人分の座席がある機首は別個機首であり、実用モードのこの位置に乗り込んだかもしれない。

特記事項

国連およびNERVで運用されるヘリ

国連軍のほかNERVでも用いられており、輸送及び乗降において運用されることが多い。世界初一機がドクターヘリ以前の機体である大型輸送ヘリ・スーパースタリオンは、第10使徒サハウェル襲撃時の特別空軍飛行の機体の機。第3東京市住人の大量避難に活躍した。また、機体重量を減らした無人ヘリコプターは使徒などの情報収集によく用いられている。



従来の機体より機首がスーパースタリオンも、MH-55dの元となったと思われるCH-53カブレイターの3人乗員座席を1機。

時代に沿ったEVA3号機起動実験

3号機の起動実験と、不測の事態

TACTICS SHEET

EVAの建造は、NERV本部だけでなく、世界各地に置かれたNERVの支部でも行なわれている。建造自体は設備やパーツの調達ができれば可能と推測される。さらにEVAの建造と並行して、操縦者の選出も行なわれている。この「操縦者の選出」が最も困難な作業であると言っても過言ではない。このため、EVAを建造しても適性を持つ操縦者が見つからなければ、起動実験の実施は事実上不可能で、それは機体の就役の遅延に直結する。さらに適性を持つ人物が見つかったら、EVAとのシンクロによっては、最悪の場合、「暴走」を引き起こす危険性すらある。これは、第3使徒サキエルとの戦闘の22日前に行なわれた「零号機起動実験」からも明らかである。このように、EVAの起動には技術的なもの以上に、人的な要素もクリアしなければならない。

現時点で就役している3機のEVAでは、複数の使徒の同時展開への対応や、他機の修復時などにバックアップを行なうことは困難である。そのため、NERVは新たなEVAの配備と操縦者の選出を急いでいた。EVA自体は、13号機までの建造が許可されていたこと、アメリカとドイツのNERV支部で複数機のEVAの建造が進められていたこともあって、比較的早期に配備されると考えられた。しかし、最大の問題が操縦者の選出であった。操縦者がどのような基準で選ばれるかは不明だが、「コード707」とされる施設が関係していると言われる。3号機の建造と前後して、ついに連絡者が見つかり、EVAの起動実験が行なわれることとなった。

3号機の起動実験の直前、アメリカのNERV第2支部では4号機の建造時に事故が発生していた。この事故でNERVは第2支部と4号機を同時に失うこととなった。こうした事故を防ぐためか、3号機はアメリカ第1支部から日本へと移送された。貴重な操縦者をアメリカまで移動させることは危険であり、EVAを移送せざるを得なかったこともその理由のひとつと考えられる。これを受けて、松代にあるNERVの第2実験場では起動実験の準備が進められた。懸念されていた連絡者が見つかったことも、起動実験が早期に実現した最大の要因であることは間違いない。こうして、技術的、人的な不安を排除して、3号機の起動実験が実施されることとなった。

RELATED MATTERS

鈴原トウジ

- 第13使徒/リディエル社
- エヴァンゲリオン
- NERV



4人目の連絡者として選出された少年。彼はEVAへの搭乗にあたり、緑の配服を身につけ、



このEVA3号機の起動実験がスタートした。もともと成功すれば、NERV4号機のEVAを補完するはずであった。

3号機の移送経路

アメリカのNERV第1支部で建造されたEVA3号機は、松代での起動実験のため、輸送機にて空輸された。武号機のように海路が選ばれなかった理由として、ガギエルのような水中での活動に特化した使徒の襲撃を警戒していたことが考えられる。しかし、飛行タイプの使徒が出現しないという保障もない状態での空輸は、安全性の面で疑問もたれる。第1支部を出発した輸送機は指定のコースを飛行し、定刻より約2時間遅れて松代へと到着した。



輸送機は道路上に積乱雲を確認。雷を要した翌朝は予定コースを取らずに指示している。

輸送機のコースと、管制との交信内容



1 第1支部より、EVA3号機出発

指定のコースで出発したEVA3号機が第1支部を出発。目的地は起動実験を行なう松代であった。

2 航路上に積乱雲を確認

輸送機は航路上に積乱雲を確認した。当初からの予定より、積乱雲を回避せずに予定コースを取った。

3 松代に到着

予定より2時間遅れて、輸送機が松代に到着した。この時点ではEVA3号機に異常は見られなかった。

起動実験時における誤作動

結果からいって、起動実験は失敗であった。EVAと操縦者のシンクロ問題ではなく、これに関しては赤木博士も驚くほどであったと言われる。EVA内に高エネルギー反応が認められたためである。状況の急変に対し、NERVの技術科スタッフはアンビリカル・ケーブルの強制排除、エントリープラグの射出など、所定の停止措置を行なっている。しかし、自律的な活動能力を得たEVA3号機は暴走とは異なる動きを見せ、松代の実験場を破壊、外部へと突出したのである。



4号機と第2支部の喪失はNERVに隠蔽された。その直後、3号機の航路に合わせるかのよって4人目の搭乗者が見つかった。

起動実験時における各段階での動き

AC/CG: SHIRO

1 EVA3号機、日本に向け出発

NERV第1支部で建造されていたEVA3号機が、起動実験の実施のため日本に向けて出発した。日本では、松代の実験場を受け入れと実験の準備を行なうと共に操縦者の手配を進めていた。



3号機は十字の拘束具に固定され、輸送機で運ばれた。航路での輸送は、水中型使徒の出現を警戒したためと思われる。

2 輸送機、定期報告を行なう

輸送機は航路上に積乱雲を確認したことを管制に連絡した。これに対し管制からは「航路変更せず、到着時刻を遵守せよ」との応答があった。輸送機的重要性を考えた場合、その対応には疑問を持たざるを得ない。



輸送機と管制はそれぞれユウクバ、ネオン・400というコールサインで通話している。

3 松代、起動実験の準備を完了

起動実験の準備と実施のため、NERVから葛城三佐と赤木博士が松代に到着した。彼女たちの到着より、同地では実験の準備が進められていた。また、同時点ではEVA3号機と操縦者は未定であった。



3号機の操縦者は、彼女たちの翌日、松代に到着する予定であった。

4 EVA3号機、松代に到着

予定より2時間遅れて(到着予定時刻および到着時刻は不明)EVA3号機が松代に到着した。この後、EVA3号機は実験場に運ばれた。翌日以降に予定されていた起動実験の準備が行なわれた。



3号機の到着が遅れた理由は不明。葛城三佐からも報告は受け付けていなかったようだ。

5 EVA3号機、起動実験開始

EVA3号機と操縦者の到着後、起動実験が開始された。第1次接続の完了後、順順にシークエンスを消化、その様子は赤木博士にも見届くのであった。そしてついに絶対同期を突破、EVA3号機は起動するかに思われたが……



初期コンタクトは良好、操縦者も3号機のシンクロに慣習し、良好であった。実験の結果次第では、早期の配備も可能と考えられた。

6 EVA3号機の暴走

実験中、突如シークエンスが強制、これを見た赤木博士は実験の中止を命じた。しかし、EVA3号機は独自に活動を開始。通達を受けたNERV本部では、救助隊を派遣すると共に第1機銃隊配置を急令した。



3号機は、赤木博士の命令に逆反した。NERV本部では確認を急ぐが、バスターがオンレンジであった使徒へと衝突されることになった。

特記事項

見い出された4人目の搭乗者

EVAの操縦者の選出はNERVに代わって高野であったため、特定の施設などを用いていたとされる。これを先に述べた「コード707」と呼ばれる施設であり、そこは警号機から試号機までの操縦者の選出で中絶された。



4人目を発見した。武号機の操縦者は不機嫌を示した。

A.D.2015

●第巻中学校

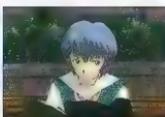
01 アスカ、学校生活に溶け込む

レイの態度にアスカは困惑を隠せない

第巻中学校へ転入したアスカは学園生活にすっかりなじみ、ファーストシルドレンはどこにいるのかと、碓シンジに訊ねる。そして綾波レイの前に立ったアスカは自信あがりな笑みを浮かべながら、仲よししようと告げた。ところがレイの反応は彼女の予想に反していた。「どうして?」そのほうが都合がいいからよ。いろいろとね、「命命があればそうするわ!」……愛わった子ね。我関せずといったレイの反応に、アスカは面食らってしまう。



生徒たちと楽しくおしゃべりして話らう。アスカは、ソノからの母親の手紙を思い出して涙を流す。



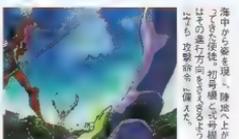
帰ってみたいようなアスカ人気を利用したトワシとケンケは、彼女の言葉でもチャッカリもうけている。一方、アスカはもうひとりのパイロットであるレイに自己紹介をしたが、無関心な相手の態度に戸惑いと違和感を覚えることになる。

A.D.2015

04 アスカ、先制攻撃を仕掛ける

電光石火の一撃が使徒を切り裂くが……

輸送機から投下された2機のEVAは使徒の前に立ち上がった。「ふたりばかりなんて卑怯でやだな。趣味じゃない!」コックピットでぶつぶつぼやくアスカ。しかしミサトから攻撃命令が下るやいなや、アスカは我先にと突っ込んでいった。「あたしから行くわ。援護してね!」「え、援護?」レイ「ファーストよ!」援護するシンジに呼び返したアスカは使徒にまっすぐ飛びかかると、ソニックグレイブの 撃で相手を両断した。



海中から襲来を察し、陣取へ上がり。この使徒は、初号機で式攻撃したときと同じように、ソニックグレイブで切り裂かれた。



誰よりも自分が優秀であると思われたアスカは、攻撃命令が出ると同時に、ソニックに相打ちせず、さっさと先制攻撃に出してしまう。高々とジャンプしてからのソニックグレイブの 撃に使徒の体は真っ二つになった。

2015年

 アスカ、
 学校生活に溶け込む

 ミサト、
 加持の態度に奇立つ

 初号機と式号機、
 迎撃のために輸送機で発進
 紀伊半島沖に使徒が出現

A.D.2015

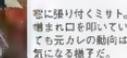
●NERV本部

02 ミサト、
加持の態度に苛立つ

仕事中の赤木リツコを、加持が不意に抱きしめた。「少しやせたかな? 嬉しい意をしてくるからな」キザなセリフをささやく加持にリツコは苦笑を漏らす。「口癖くつもけ?」でもダメよ。こわいお姉さんが見ているわ! 彼女の言葉どおり、すぐ前の窓に張り付いたミサトがふたりを覗んでいた。



加持の態度は学生時代から少しも変わってなかった。



窓に張り付くミサト。唾まれ口を用いていても元々の顔向は氣になる様子だ。

A.D.2015

●紀伊半島

03 紀伊半島沖に使徒が出現

使徒出現の報を受け、EVAに出撃命令が下る

紀伊半島沖を警戒中の巡洋艦「はるな」から、海中に巨大な潜行物体ありとの報が入った。遊長パターンは賞。新たな使徒の出現である。不在中の総ゲンドウに代わって指揮を執る冬月コウゾウは、初号機と貳号機に出撃命令を出した。

→金高的な先声も有する使徒。艦部にはコアが露出している。



発令所に警報が鳴り響く。紀伊半島沖で発見された潜行物体は、やはり使徒であった。冬月は即座に第一種駆逐艦配置への移行を命じる。

第3新米沢市の遊撃システムは、使徒の軌跡をリアルタイムで追跡し、追跡データを送信している。

上陸直前の使徒は水深で叩く操作の軌跡をリアルタイムで追跡し、追跡データを送信している。

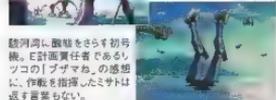
05

EVA、使徒に敗北

勝負は決したかに見えた直後、目を離すようなことが起きた。両断された使徒が、ふたりの目前で2体になって復活したのである。「なんてインチキッ!」思わすヘッドセットを握りつぶし、わめくミサト。結局、分断された使徒に翻弄された2機のEVAはあっさり敗北を喫してしまっただけ。しかも、それぞれ海に煙に頭から落下してしまうという不愉快な負けっぷりで、NERV職員たちを呆れさせたのだった。



盲目より使徒を仕留めたとアスカが語った直後、使徒は2体へ分断して再生。予想外の事態にシンジとアスカは呆然となる。

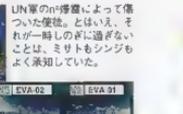


駿河湾。艦艇をさらす初号機。E対面責任者であるリツコの「ブザマね」の感嘆詞に、作戦を指揮したミサトは返す言葉もない。

●駿河湾

06 n²爆雷によって
使徒の足止めを図る

NERVによる作戦が失敗したあと、指揮権を継承されたUN軍はn²爆雷による攻撃を敢行した。強力な破壊力を有するn²爆雷は少なからぬダメージを使徒に与え、彼の足止めに成功。その結果、使徒は便装を停止し自己修復に入った。足止めは過ぎず。再度便装は時間の問題だ「ま、立て直しの時間が稼げただけでも、もうひとつのミスよ」EVAの態度に苛立つ冬月を、加持が軽い調子でなだめる。



UN軍のn²爆雷によって傷ついた使徒。とはいえ、それが一時しのぎに過ぎないことは、ミサトもよく承知していた。

失敗の原因を巡って罵りあうシンジとアスカ。冬月が協力、あとと尻責するも、ふたたび「なんでこんやん」と口論。

A.D.2015

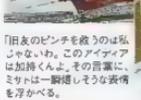
●NERV本部

07 ミサト、加持から
使徒攻略のヒントを得る

作戦に失敗したミサトの下には、関係者各々から山のような抗議文と被害報告書が届いていた。だが、ミサトはめげることなく打倒使徒への闘志を燃やす。そんな彼女に、リツコは使徒殲滅のためのアイデアが入った1枚のディスクを手渡した。「さすが赤木リツコ博士。持つべきものは心算しき田友ね」喜ぶミサトだったが、リツコからそのディスクの提供者が加持だと聞かされると、複雑を臉つきになるのだった。



ディスクはいっぱい積み上げられた抗議文と被害報告書の山。リツコはミサトに、「マイ♥ハニーへ」と書かれた一枚のディスクを渡した。



「田友のピンチを救うのは私じゃないわ。このアイデアは加持くんよ。その言葉に、ミサトは一瞬躊躇うような表情を浮かべる。

初号機と貳号機、
海岸線で使徒を攻撃先制攻撃を仕掛ける
アスカ、

使徒、2体に分断して反撃

初号機と貳号機、
使徒に敗北するUN軍、n²爆雷を投下

使徒の足止めに成功

ミサト、加持から
使徒攻略のヒントを得る

A.D.2015

08 アスカ、ミサト宅へ引越し

シンジが家に帰ると、部屋が大量の段ボール箱に占拠されていた。「なんだこれ!?」「失礼ね、あたしの荷物よ」シンジの叫びに答えたのは、ラフな格好のアスカである。「あんた、今日からお引越しよ!」「え?」「ミサトはあたしと暮らすの。まあ、どっちが優秀かを考えれば、当然の選択よね」唖然とするシンジに、アスカは鼻高々といった様子で告げるのだった。



ダンボールが溢れる部屋にびっくりするシンジ。おちにおちと落ち出されたアスカは、アスカの「一方的な引越し宣言」にタジタジとなるシンジ。そんな状態を眺めつつアスカは次々と荷物を運び入れる。

09 ミサト、使徒殲滅作戦を説明する

アスカが日本住宅について文句を言い出したところへミサトが帰宅した。ミサトは使徒を倒すため、シンジとアスカと共に暮らすのもうと言い出し、使徒を倒すには分難中の使徒のコアに対して同じタイプミソグで攻撃を掛けるしかないのだ。そのためにはかなりの突撃を強要し、完璧なユニオンが必要なのアスカは猛烈に抗議するが、ミサトは相手にしなかった。



「イヤ!」 昔から男女7歳にして同棲させてね!」アスカの強執議を、ミサトはにべもなくはねのけた。
「この曲に合わせた攻撃パターンを覚えろよ。6日以内に、ふたりで死ねられた場合はとんだな。」

A.D.2015

10 シンジとアスカ、練習に失敗

音楽ゲームを利用したユニオンの特訓が始まって9日。羽木ヒカリとトウジとケンスケがふたりを心配してやってくる。3人を前にして、ユニオンが面白いかなのはシンジのせいだと怒りまくるアスカ。だがレイに彼女の代わりを強めさせると、シンジとのコンビネーションは完璧だった。その光景にアスカはショックを受け、その場から逃げ出してしまふ。



シンジとアスカが同居していることを知らなかったヒカリたちは、その日のレオナードのみたりに出逢えられて、驚愕する。
レイとシンジの「見事な」コンビネーション。これはして損だばかりかいいかも。ミサトの言葉にアスカは唖然となる。

A.D.2015

●第3新東京市

13 シンジ、アスカと一夜を過ごす

決戦前夜、ミサトが帰宅できないためにシンジはアスカとふたりで夜を過ごすことになった。深夜、寝ぼけてシンジの寝床に転がり込んでくるアスカ。寝込んだ姿にドキドキしたシンジは、つい唇を近づけてしまう。その時、アスカが寝言を漏らした。「マ……」正気に戻ったシンジは身体を離し、「自分だと子供のくせに」と不服そうにぼやいた。



眠れぬ夜を過ごすシンジがドキドキという音に振り向くと、隣の部屋で寝ているのはアスカの姿があった。
あらゆる、嗜好とすぐそこにある唇を見て、いるうちに、シンジは心ならずもアスカと唇を近づけていってしまう。

A.D.2015

●NERV本部

14 リツコ、ミサトをからかう

その時、NERV本部では、ミサトが加時に唇を奪われていた。こういうことはやめてくれとミサトが言っても、加時は余裕の態度を崩そうとしない。その後、めずらしく飲んでいない様子のミサトをリツコがからかってきた。「仕事? それとも男?」いろいろ、ミサトがあいまいに返すと、リツコは意味ありげに笑った。「ふん、まだ好きなかしら……」



強引にキスを強要するミサト。一方の加時は、「さきの唇はやめてくれとは言わなかったよ」と楽しそうに微笑んだ。
「今度はもう少し素直になつたら?」思わずコトコトを吹き出しそうになったミサトに、リツコはそう宣言するが……

A.D.2015

15 使徒殲滅戦、開始

自己修復を完了した使徒が再び再起動した。「目標は強羅絶対防衛線突破!」来たたね。今度は技が足りないわよ!」青葉シゲルの声に待ってましたとばかりにうなずいたミサトは、EVAで待機中のふたりのパイロットへ向けて指示の再確認を促した。「音楽スタートと同時にA.T.フィールドを展開。あとは作戦通りに。ふたりとも、いいね!」



いよいよ第3新東京市へ向かって動き出した使徒に対して、NERVスタッフたちは万全の準備を整えて待ち構えていた。
華麗なこの作戦指示を真実な表情で聞いているシンジとアスカ。いよいよ特訓の成果を試す時が来た!



葛城博士以下の科学者が編成された調査隊。理論を信じて真実を追い求めた彼らは、
 2004年6月でその命を落とすこととなった。なお、その開発費料は、一部の映像を残してすべて消滅した。

葛城調査隊

その活動とセカンドインパクトの関連性

枯渇が危惧される物質を主なエネルギー資源としているがゆえに、いつの日かエネルギー不足に直面するであろう人類。そんな人類にとって、外部からエネルギーを受け取ることなく仕事をない続ける機関——「永久機関」と呼称される動力は、まさに夢のような存在といえる。さまざまな科学者や技術者が研究を行なった結果、実現は理論上不可能とされてきた同機関に、ある理論による実現の可能性が窺われた。その理論とは、日本の科学者、葛城博士が1999年に提唱したS²（スーパーソレノイド）理論である。エネルギー資源の確保が急務とされてきた人類にとってこの理論の実証は急務であり、翌2000年には早くも国連の協力のもと「葛城調査隊」が組織され、調査隊は国連南極基地に移動。永久機関の開発計画に着手する運びとなった。

しかし、その裏では、国連に多大な影響を与える秘密結社ゼーレが暗躍していた。彼ら、南極地下には彼らが発掘した巨大空洞があり、そこには巨大なH型物体 第1使徒とされるアダムが

眠っていたのである。彼ら調査隊を送り込んでいたゼーレは、永久機関の完成を目的としていたのではなく、このアダムに関連する計画を遂行していたと目されている。

アダムとS²理論の関連性は明らかにされていないが、ふたつの計画は厳密に進められていたかに見えた。しかし、同年9月12日、キール・ローレンツら一部のメンバーは突如として帰国の途に着き、翌13日、有史における最大の災害セカンドインパクトが発生する。爆心地と化した南極基地は跡形もなく吹き飛び、調査隊の生き残りは当時13歳だった葛城ミサトただひとりであった。公式声明では隕石が原因と発表されるが、実は人災であったセカンドインパクトの発生原因はあえて隠匿されていた。その真の原因はアダム関連の計画であったと言われており、結果的に一部の人間を除いた葛城調査隊の面々は、国連とその背後にあるゼーレという存在のための犠牲となり、南極の地で果てていった。ちなみにその経緯から察するに、S²理論すらもゼーレから与えられた情報だった可能性も否めないが、その真相は明らかにされていない。



■セカンドインパクト
 ■葛城博士
 ■S²理論
 ■南極



南極大陸で発生した大爆発。両大陸は瞬時に消失し、地球の自転軸が変化。地球規模の災害をもたらした。

葛城調査隊の活動の裏に隠された 支援組織ゼーレの思惑

国連の支援を受け、国連南極基地においてS'機関の開発に着手することとなった葛城調査隊。彼らはさながら熱病に冒されたかのように、人類に多大な恩恵をもたらす夢の永久機関の完成に尽力した。その研究も、実際に進展を見ていたという。

しかし、実際にその活動を支援していた組織から見れば、S'機関の開発はあくまで「表向きの計画」に過ぎなかった。その組織とは国連ではなく、当時、すでに国連に多大な影響を与えていたゼーレにほかならない。ごくわずかではあるが、彼らの狙いは調査隊が引き起こしたとされる厄災「セカンドインパクト」そのものだったと見られる者もいた。しかし、事実はおろか、そういった告発すらも公となる前に排除され、真実は一部の人間のみが知るところとなった。

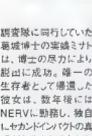
国連南極基地での出来事と セカンドインパクトの影響

葛城調査隊が南極に渡り、S'機関の開発は順調に進められていた。しかし、調査隊の一部の人間の目的はS'機関の完成にはなく、ゼーレが発掘した地下空洞に眠る「アダム」と呼ばれるヒト型生物の調査と、それに関連する計画の実行であった。

そして2000年9月13日、地球を未曾有の大災害が襲った。後にセカンドインパクトと命名されたこの災害により南極は消失し、地球の自転軸が変化して地球規模の異常気象が発生。例えば、海面が十数m隆起し日本東京都心が水没するなど、その猛威は世界各地を覆った。さらに世界的な情勢の不安定化により、旧紛争地域での衝突が再燃、テロリストによる武力行使などが頻発する事態を招いた。ただ、人為的な被害については、国連により強大な国連軍が結成、派遣されたことで、一応の終息を見ることになる。なお、セカンドインパクトの原因調査は、世界が一応の平和を取り戻した後、数次に渡って派遣された国連南極調査隊の手によって行なわれた。ただし、彼らが公表した調査結果と事実は、大きな隔たりがあった。



セカンドインパクト直前の南極基地。なお、参加していたメンバーの大半は、この時点で、レンジャー、総司令官は乗船を拒否していたため、前日はすでに乗船を拒んでいたという。



調査隊に同行していた葛城博士の乗船とミサトは、軍の協力により、脱出に成功。帰りの生行中として派遣された官は、数年後にNEVERIを脱走し、独自にセカンドインパクトの真相を調査することとなる。

セカンドインパクト 前後の各組織の活動

S'理論の登場とセカンドインパクトの発生により、激動を迎えた1999年から2002年。この間、さまざまな騒動を発生させたゼーレは、核源する古文書「裏死海文書」の有用性をもって、その影響力を拡大。その恩を受けた国連は、世界復興の旗手を担うこととなる。結果的に葛城調査隊の活動は、その二番を際立たせるための役目にならざるを得ない。



ゼーレと国連の結びつきは強く、NEVERIとその前身となった各組織は、「裏死海文書」を持つゼーレの意向に沿って立ち上げられた。



1999年、S'理論は人類に希望と希冀を与えた。さらに研究に前後して起きたさまざまな出来事は、歴史から地球に生じる人間を、大きな転機点へと向かわせることとなった。

●事故前後のおもな出来事

- | | |
|-------|---|
| 1999 | 葛城博士、S'理論を提唱
ゼーレ、南極各地で遺跡を発見。
南極の地底に巨大空洞を発見 |
| 2000 | 葛城調査隊、南極へ。
現地にてS'機関開発に着手
死海からロンダースの核を回収。
国連南極基地、結成 |
| 9月12日 | 葛城調査隊の一部の人間が国連 |
| 9月13日 | 葛城調査隊、突如中止。事故発生
セカンドインパクト発生。南極大陸が消失 |
| 9月15日 | インド、パキスタン間で最終地上の軍交が完了。さらにムルガン、カンホダ、ロシア等でも争乱、紛争が連鎖的に発生 |
| 9月20日 | テロリストが東京・新丸ビル地下 |
| 2月14日 | 植込した東京に代わり、日本の首脳府を基幹の松本（のちの第2東京市）に移転 |
| | 瀬野石油、富士山麓地下巨大空洞を発見 |
| 2月14日 | バンタンイキ体操競技場と約結 |
| 2002 | 第1次国連調査隊、南極に派遣
セカンドインパクト調査委員会による公式声明が発表 |

セカンドインパクトの 原因究明と公表内容

セカンドインパクト発生当初、その原因については「葛城調査隊の実験失敗による爆発」などさまざまな説が流布していた。国連南極調査隊が派遣されたことにより、原因は究明されるかと思われたが、その公式声明は「光線の数々の速度で飛来した大質量の隕石が南極に衝突したこと引き起こされたものであり、事前予測は不可能な天災、

S'機関の研究が行なわれてきた未曾有の大災害。その原因の調査は国連主導のもとに行なわれたため真相は公表されず、さまざまな憶測が流布することとなった。

というものであった。しかし、「光の巨人」と呼ばれるヒト型生物や、「光の別」といったものも映像が記録された。唯一の生き残りである葛城ミサトもまた「光の別」を目撃している。一般に真相は明らかとされてないが、公式声明が偽りであることだけは確実といえる。

●調査団メンバーの装備



●1号と2号は防寒装備と似た印象の、重さ約40kgの防寒服の着用。なお、第一次となる調査団には葛城調査隊のメンバーがほとんどで、2月17日の乗組も同様であった。

●セカンドインパクト直後のミサト

「セカンドインパクトの直後、ただから命断ともいえる生還を遂げた。唯一の目撃者となったミサト。彼女はその身体に、大きな傷を負っただけでなく、少女ながらも1年以上、ショックの大きさとともに失語症を患っていたという。



特記事項

立場による認識の違いについて

一般的には、公式声明通り「天災」と認識されているセカンドインパクト。だが、その見解は立場により異なる。2002年には冬が、2015年には加村リョウジからデータを覗き聞いたミサトが原因究明を試みた。その真の原因は「ロンギヌスの槍をアダムと接触させ、アダムを船底に運送しようとしたため」と言われてしまった。そのセカンドインパクトがその結果「起きてしまった」事故なのだが、「あえて起こした」予定された事業なのかが究明された。ただし、当然事を除き真相は最も不明瞭な点であり、かつての冬とミサトだけとことごとく追加してある。



●「人類滅亡計画」を暴露するうちに、乗組員に狙われたために運送ミサト。しかしその計画と「真相」とは異なっていた。

●シンジの単独任務の裏話や補遺などを発表する際、一般人レベルでも、公式声明通り「天災」と認識されることが多い。

S機関

S ENGINE

伊吹マヤ二尉が口にしてるように、西暦2015年は「科学万能の世界」である。第3新東京市に代表される巨大な都市を建造したり、人工知能MAGIによる管理体制を確立したりするなど、科学がもたらした恩恵はさまざまな場所で見て取れる。セカンドインバクトの惨劇から15年という短期間で人類が復興を遂げたのも科学の賜物であり、まさに人類は科学の力によって繁栄してきたと言っても過言ではない。だがそんな科学至上主義ともいえるべき傾向を持つ人類でさえも未だ入手できないものがあった。無限のエネルギーをもたらす動力——すなわち永久機関である。

永久機関の研究は古く、単純な装置は紀元前から考案されていた（『アルキメデスの無謀謀案』と呼ばれる描水装置が有名である）。歴史が下ると共に永久機関の研究は進み、産業革命以後は装置の開発に成功したという者が続出した。だが検証の結果、これらの装置は永久には動かないことが判明する。運動力学と熱力学の発展が永久機関の矛盾点を暴露出したのである。物体が運動を続けるためには外部からの力（もしくは熱量）の供給が必要であるということが証明され、以後、永久機関は疑似科学の一種と見られるようになる。とはいえ無謀のエネルギーを希求する声が減ることはなく、永久機関の研究は細々とながら継続された。そして1999年、ついこれまでの永久機関とは一線を画する画期的な理論が提唱されることになった。それが「S機関」である。

日本の葛城博士が基礎理論を提唱したS機関だが、彼がどこからこの発想に至ったかは判然としていない。さらにS機関の実験は国連主導の下に行なわれ、外部にはその謎めいた名称以外は、詳細な情報は一切伝わっていないのである。一説によれば西暦2000年に南極に派遣された葛城調査隊は、S機関の開発と始動実験を目的としていたとされる。だがセカンドインバクトによって南極大陸もとも葛城調査隊はこの世界から消え去り、S機関とそれにまつわる情報も失われてしまった。だが、その一方でS機関は実在するとする向きもある。特殊機関NERVの上部組織にあたる謎の組織が、その開発と始動実験に成功したというのだ。とはいえこれも、種間たる権威を持たない噂に過ぎないのだが……



RELATED MATTERS

■ 第二シブツロバ外伝
■ セカンドインバクト
■ エヴァンゲリオン使徒
■ 葛城調査隊



外部電力を主動力とするEVAだが、第14使徒との戦闘中に磁石を磁化することによってそのS機関を取った。

原理と実験の成果

S機関の正式名は「SUPER SOLENOID (スーパーソレノイド機関)」であり、スーパーソレノイドとは遺伝子を構成するDNAの集合体を指す言葉である。このことからS機関は遺伝子構造に働きを発するものと推察できる。単細胞生物から誕生した地球生命が人類に進化するためには、進化

の中核となった遺伝子にある種のエネルギーが秘められていると考えた学者が「人間原理」という学説を提唱したこともある。しかし、S機関がそれ以上のものであることは間違いないだろう。



現存する数少ない実験記録の影絵に「実験対象は人間の遺伝子をタイプさせた」との書きがあり、このことからS機関が遺伝子構造と密接な関係を持つことが推測できる。

S機関の能力

NERVとその関連組織を別とすればS機関を保有する組織はなく、葛城軍団も消滅したことでこの永久機関の全容を知ることが難しい。だが使徒と呼ばれる前立兵器群はS機関を搭載しており、使徒の行動からS機関の持つ能力の一端を窺い出すことができる。使徒が優秀な単独兵器として見なされるのは突出した攻撃力と防御力、さらに自己再生能力を有しているためだが、これらの能力を発揮するベースとなっているのがS機関から供給されるエネルギーであるのは、ほぼ間違いないだろう。また回収された使徒の断片からその構成要素が分析されているが、使徒と人間の固有波形パターンは99.98%まで一致しているとの情報がある。固有波形パターンと一致した遺伝子情報が見つかるかどうかは不明だが、S機関が遺伝子情報と関係が深いことを鑑みると、使徒がS機関を有する解を解く手がかりになるかもしれない。

使徒製造のために用意され、使徒に搭載する能力を有するEVAシールドが、S機関を搭載しているために活動時間が増大されていると推測されている。



S機関を取り込んだ使徒を、使徒「母」と呼ばれた。永久機関としてのS機関を、言葉に記録された「生命の美」と呼ばれたこのように

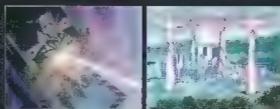


S機関/理論提唱と実験の歩み

- AD.1999 葛城博士、S機関の基礎理論を提唱
 - 資金調達から来る代官資源を求めた人類にとって、無限のエネルギーを約束するS機関は新たな世紀に向けての福音となるはずだった。
- 関連の支援を受け、実験モデルの製作に着手
 - 関連の全面的な協力を得た葛城博士を中心に実験モデルの製作が開始されたが、実験には完成しなかったと情報も伝わっている。
- AD.2000 葛城博士率いるプロジェクトチーム (葛城隆彦監、南條へい)
 - 東京中立地区の商業ビル構間の開発を行なう計画が進められたが、高層の地下で発見された古代遺物の調査が目的だったという向きもある。
- S機関の実験モデルの運用試験を開始
 - 古代遺物から発見されたアダムと呼ばれる謎の巨大生物がS機関を搭載しており、その分析と再起動こそが葛城博士実験の真の目的だったとも言われている。
- AD.21 セカンドインパクト、発生
 - 公式発表では狭小大質量隕石の衝突がセカンドインパクトの原因とされているが、S機関の暴走が形勢を引き起こしたという情報も存在する。
- AD.22 NERV、第4使徒からS機関を回収
 - コア以外にはほぼ原型を保持しており、人類史上初めて、完全な形のS機関が入手できたと認められる。
- NERVが支援、S機関の復元に成功
 - の復元作業は、最終的にEVAにS機関を移植するまで完成したまでの作業だったようだ。
- NERV第2支部 (アメリカ)、S機関の暴走により消失
 - 復元したS機関は失われたが、その使徒はセーラーに渡っており、捕縛と開発を進めることになった。
- EVA初号機、使徒との戦闘中にS機関を取り込む
 - 使徒を捕食することでS機関を取り込んだ初号機は、それ以降の活動時間が無限大となった。

攻撃兵器を稼働するためのエネルギー供給源

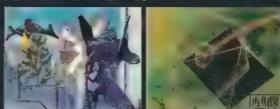
第3使徒をはじめとする何体かの使徒はS機関から供給されるエネルギーを動力とする兵器に使用している。第3使徒や第4使徒の兵器、第6使徒の直列兵器がその代表。射撃兵器を有している使徒もあるが、その際には圧倒的なパワーを駆使した特殊兵器の稼働に利用していると思われる。



第3使徒の直列兵器は、初号機の外備装甲も一瞬に破壊させた。一方、第4使徒の兵器はオメガプログラムの特殊兵器(8層)を撃ち倒している。

A.T.フィールドを展開するためのエネルギー源

使徒が「完全無欠の独立兵器」と称されるのは、A.T.フィールドという特殊な位相空間を任意に発生させられるためである。既存の兵器でA.T.フィールドを破ることは不可能であると言われる。それはどこまで強固な防壁である位相空間を生み出すためのエネルギーをS機関が供給していると思われる。



ポジットロネイバークラッシュのように強力な兵器で貫き破り、この防壁を破ることはできない。これも8層機からエネルギーが供給されているためである。

自己修復、自己進化を司るためのベースとなる力

A.T.フィールドを突破されて使徒本体にダメージが及んでも、使徒は圧倒的な修復能力を発揮し傷を治している。しかもその能力に応じて自らの能力を増強したり、即時に分解・合体を繰り返すなど、構成要素を自由に変化させている。これなどは遺伝子情報に直結したS機関の成せも事だといえる。



第3使徒は損傷を受けた部位の下に新たな部品を移植し、生体防御力を増強。また、7層機は分離された本体とそれぞれが独立した本体として機能している。

特記事項

S機関の暴走による余波

●NERV第2支部 (アメリカ) の消失

ドイツ支部で復元されたS機関の実験を行っていた第2支部だが、S機関の暴走し巻き込まれて消失。その際、内蔵したエネルギーを一貫に開放したS機関は「アラクの高」と呼ばれる虚空間を形成したと推測される。これに飲み込まれる形で第2支部は消失したとされ、後に「ホレタラ」が回収された。

衝撃軌跡の記録された第2支部。実験施設を中心とし再構築まで「アラク」の高に飲み込まれる様子の記録されている。

●セラムA.T.フィールドの展開

S機関を搭載した8機のOVA量産機は、初号機を中心とした隊形を組むとS機関を解放。その結果、アンチA.T.フィールドが形成し、影響下にあるすべての生物は自らの体を維持できず、最後には「C.O.L」と化している。ただしこの現象は前もって定められたものであり、密蔵には暴走による現象とすることはできない。



アンチA.T.フィールドはセカンドインパクトでも観測された。ただし、こちらは地球規模のナースで展開したフィールドである。

人類補完委員会委員

米、英、露、仏の代表各一人に、独代表であるキール・ローレンツ議員を加えた、全5人から成る人類補完委員会のメンバー。各委員は、ゼールにおいても重要な位置を占めていると推測されるが、その実体は不明である。



国連議会の協定組織たる人類補完委員会の各委員は、各国政府においても要人であると推測される。

人類補完委員会特別召集会議

NERV本部に使徒が侵入したとの流言を受けて開かれた会議。実際は第1使徒・ロウガが本部への侵入を果たしていたのだが、碓ゲンドウはそのような事象はないと返答していた。なお、この会議では、第3使徒から第11使徒までの事件の総括も行なっていた。



この会議における委員各々たちのスタンスに対する態度から、彼らが強い不信感を持っているのは明らかである。

人類補完計画

[E計画]、[アダム計画]と並び、碓ゲンドウが進行にあたる計画のひとつ。NERVの上位機関にある人類補完委員会の組織のもと、使徒滅滅と電をねる形で進められていく。NERVにおけるすべての任務の中で最も重要なものとされ、その内容は人々の個体生命の形を消し去り、「出来損ないの群衆として行き詰まった人類を完全な単体生物へと人工進化させる」ものだと思われつつも語っていた。サードインバウトはこの計画進行の過程（もしくは人類補完計画の一部）で発生している。計画はゼールと碓ゲンドウが共に目指してきたものではあったが、互いに計画内容や方法が異なる部分もあったようで、最終的に両者は決別している。ゼールの当初の計画では、EVAシリーズよりリリスの卵である黒き月を振り起こしたのち、ロンギヌスの槍を用い、リリスを依代に行なう予定であったようだが、第15使徒アタルシエにおいて槍が失われてしまったため、予定は変更され「リリスの分身」であるEVA初号機が使用される人類の補完が開始される。一方、ゲンドウが想定していた計画

は、その手にアダムの肉体を宿し、綾波レイと融合することにより「アダムとリリスの凝じられた融合」による人類の補完を行ない、「人類の心の隙間を埋める」というものであったようだが詳細は不明。ただ、碓ユイに再び逢うための手段と考えていることは確かである。



初号機を依代とした人類の補完が始まると、人々は自らの境界線を見失いL.C.L化していった。

CATEGORY す

スイカ畑

加持リョウジがスイカを育てていた家庭菜園。ジオフロント内の森の一角に作られている。「畑を作る」「育てる」ということにより様々なものが見えるという加持の、意外な趣味のひとつ。「死めどきはここにいた」と、第14使徒ゼルエルがジオフロントに襲来した際も、加持はこのスイカ畑で水を撒いていた。なお、のちに死を覚悟した加持は、最終ミサトに畑の水遣りを経験している。



家庭菜園は内緒の趣味らしく、碓シンジにだけ明かしていた。そこで彼に「つらいこと知っている人間はほうが、それだけに生かすことができる」と会食ある大人の言葉を感じている。

水槽

ダマシシステムのコアとなる部分、その生産工場である巨大な水槽。大深度地下施設中央部セントラルドグマにあり、クロニングされたと思われる綾波レイの肉体が多数保存されている。第10使徒アルミスル級戦後、姉に斬られて赤木リツコによって、水槽内部に深くダマシシステムのコアパーツであったレイの肉体が破壊された。



中央には綾波レイの複製型と思われるカプセルがあり、その部分の両面の壁すべてが水槽になっている。そこにレイの肉体の代替パーツが多数深んでいるのを碓シンジと葛城ミサトは目撃した。

スーツフィットスイッチ

ブラグスーツを体形にフィットさせるスイッチ。手首についたこのスイッチを押すことにより、スーツが自動的に各関節連絡者の体形に合わせてくれるようになっている。



身体にフィットしているイメージの強いブラグスーツだが、スイッチを押す前は余剰の状態になっている。

スクール水着

体育における水泳の授業で採用されている水泳着を指す。普通中学校では平均的な紺色の水着が学校指定となっている模様。セカンドインバウト後、常夏気候となった日本では日常的に水泳の授業があると想像し、普通中学校でも水泳授業の風景が見られる。



普通中学校の女子が着用する学校指定の水着は紺色のもので、白のゴムキャップを装着している。なお、男子の学校指定水着は不明。

鈴原トウジ

碓シンジのクラスメイト。大阪より第3新東京市立第3巻中学校に転校している。父と祖父は共にNERV関連の研究所に勤務。のちにオースチルドレンとして認定され、EVA3号機に搭乗することになるも、第13使徒バルディエルの寄生により視網に巻き込まれ左腕を失う。関西弁の熱血漢で、硬派を自称。常にジャージのスポーツウェアを着用している。EVA初号機と第3使徒サキエルの戦闘において負傷し、入院した妹を何度も見舞いに行っており、3号機の操縦者を引き受ける交換条件として妹のNERV本部医務室への転院を要求するなど、非常に妹想いの少年。初号機の操縦者であるシンジには、妹が視網で負傷した事案のためにうまく当たっていたが、のちにお互いへの理解が深まり親友となっていく。相田ケンセウも加えた3人で行動を共にすることが多く、女子生徒からは「3バトリオ」と呼ばれている。



妹と友人を想う気持ちに強い少年なのだが、恋愛方面の感情には鈍いようで、岡本ヒカリが自らに寄せられている気持ちには気付かなかったようだ。

E

エクストラシート
xtra Sheet

鈴原トウジの妹

EVA初号機と第3使徒サキエルの戦闘に巻き込まれて負傷した鈴原トウジの妹。小学校2年生ながら、トウジが破産シテを助けたことを知り、箱庭だと兄をたしなめるという、しっかりとした妹である。のちに、フォースチルドレンとして選出されたトウジの願いによって、NERV本部医学部へ転院している。



E事件の被害者として、第3新東京市の病院012号室に入院している。容態は芳しくない様子。

素手

主にEVA初号機が格闘で用い、何体も使徒を屠っている攻撃手段。プログレップ・ナイフ等の武器を使わずに、攻撃力は劣っていると思われるが、A.T.フィールドの中和によって使徒に効果的な打撃を与えている格闘である。



鉄筋がまっかつくをききなかった第14使徒はザメルも、素手の格闘には押され気味だった。

スナイパーライフル

主にEVA零号機が用いた狙撃用の銃火器。第12使徒レリエル戦、第16使徒アルミスエル戦で用いられている。



バックアップの任に就くことが多い零号機が、後方支援として用いていた。

スマッシュ・ホーク

EVAが装備する近接戦闘用の武器。巨大な斧のような形状を持つ。プログレップ・ナイフと同様、超振動で敵を分子レベルまで切り裂くことができる。第12使徒レリエル戦において、EVA試号機がこれを装備していた。



レリエル戦では武器としての使用はされなかったものの、スマッシュ・ホークを足場代わりにビルをよじ登ったおかげで、試号機同使徒の影に飲み込まれずに済んだ。

駿河湾

静岡県伊豆半島の石廊崎と御前崎を結ぶ約1北側の海域で、日本一深い湾。第7使徒イスラフェルが襲来した際の最初の戦闘において、EVA初号機が水没した。



分裂したイスラフェル甲の攻撃によって、初号機は駿河湾沖合2kmに水没してしまふ。

CATEGORY せ

Glossary

生活当番表

綾シンジと葛城ミサトの同居にあたり決められた生活当番表。朝食、夕食、ゴミ、洗濯、風呂掃除などの項目がある。一応ジャンルで決められたものの、ミサトが圧勝してしまがために、ほとんどはシンジの当番となっている。



ミサトが言うところの「公平な」生活当番表。ちなみに、このわずかなミサトの当番も、のちにシンジが代わって担当することとなったようだ。

聖痕

EVAシリーズが装備するロンギヌスの槍がEVA初号機の両手を貫いた際の傷跡を指して、ゼレールのメンバーが言った言葉。その際、シンジの両手にも同じように傷が出現した。ゼレールが定める人類補完計画において、初号機を依代とする

ための儀式のひとつであったと推測される。なお、聖痕とは本来、刑罰のキリストと同じ傷が、生きている人間の身体に浮かび上がる現象を指す。これまでに、両手と両足の釘の穴、膝蓋の槍で刺された傷のほかに、頭部のイバラの冠の傷、背中のむち打ちの傷などが現れた例があるとされる。



シンジの手に現れた聖痕。ロンギヌスの槍による聖痕を受けた初号機は、この後、生命の糧へと変換していく。このように、ゼレールの目指した人類補完計画は、随所に宗教的な部分が見られる。

静止した闇の中で

第拾巻のサブタイトル。英文タイトルは「The Day Tokyo-3 Stood Still」。邦訳すると「第3新東京市の静止した日」となる。なお、1951年にアメリカで公開されたロバート・ワイズ監督「地球の静止する日」の原題に、「The Day the Earth Stood Still」とある。この映画の内容は、ワシントンに突如現れた銀色の円盤の中より地球に降り立った人間の姿をした宇宙人クラウトとロボットのゴートが、核兵器や戦争による脅威を、宇宙をも滅ぼしかねないことを地球の人間に訴えるべく、地球の全エネルギーを停止させるというもの。

精神汚染

EVAとの神経接続の際に神経パルスが逆流することにより、操縦資格者の精神汚染等が引き起こされること。また、アスカが第15使徒アラエルの可視波長のエネルギー波による心理攻撃を受けた際にも、精神汚染が発生している。



アラエルの心理攻撃は、A.T.フィールドやC.L.T.の精神防壁をも突破してアスカの精神汚染を引き起こした。

精神崩壊

EVAとの神経接続による精神汚染により、精神が錯乱し、崩壊をきたすこと。アスカの母親、惣流・キョウコ・ツェッペリンの精神崩壊はEVAとの接触実験によるものとされているが、これもまた神経接続の際のパルス逆流による精神汚染が原因であると推測される。



精神崩壊に陥ったキョウコは、人形を自らの顔と思い込み、死の淵前まで陥けがけされていた。

NERVと一線を画す 自国防衛 のエキスパート



所属



民間



日本国政府



その他の人々

OTHER PEOPLE

2015年の使徒襲来以降、使徒の目的地となり、唯一直接的な脅威に晒される国となった日本。政府は国連に協調姿勢を見せる一方、自国防衛のため独自の戦力保有に務めた。ひとつは、時田シロウが代表を務め、使徒に対抗しうる兵器の建造を進めた民間企業の集合体、日本重化学工業共同体のバックアップ。もうひとつは、国連軍に組み込まれない日本固有の軍事力、戦略自衛隊の編成である。ただし、双方とも国連の組織であるNERVとの仲は思わしくなく、結果的に一線を画すかたちで自国防衛に務めた。その結果、両組織で活動する人々はNERVとせーれが進める「人類補完計画」のシナリオを知る由もなく、日本国政府と同様に監視に甘んじることとなった。

日本重化学工業共同体代表の時田は、J.A.完成披露記念会及びJ.A.公試運転時の管制室でその場を取り仕切っていた。J.A.暴走という緊急時に内務省長官に伺いを立てるなど、その立場は絶対的なものではなかったが、最終的には独断でプログラム消去のパスワードを開示した。なお、開発計画は頓挫することとなったが、J.A.の暴走はNERVによって引き起こされたものである。純粋に「巨大人型自走兵器を完成させる」という点にのみ着目した場合、その技術力は非常に高かったと見べきだろう。

一方、戦略自衛隊の面々はA-801（特務機関NERVの特例による法的保護の破棄、及び指揮権の日本国政府への譲渡）発令後、NERV本部施設を占拠すべく突入を開始。瞬く間に第2発令所で侵攻し、その通常戦力としての質の高さを窺わせた。



制御不能となったJ.A.を押さえ込めEVA初号機。時田の意思とは反対に「使徒に対抗し得る組織はNERVのみ」という事実を問題視し強く印象づけた。

日本重化学工業共同体代表 時田シロウ



→ 自分が有利な会員の立場だったとはいえ、才女として名高い赤木リツコの異議をやじこめた時田。その表情には、運命的な情移り以外にも、NERVへの対抗心が見え隠れする。



→ 共同体の代表として、J.A.完成披露記念会の壇上に立った時田。その際は一般的なスーツを着用していたが、後の公試運転の場ではわざと制服とおおぼしき作業服に着替えている。



戦略自衛隊 隊員



→ 特殊なスーツに身を包んだ戦自隊員。さらに、腰周りに銃火器等を携帯するためのバッグを装着しているものもある。なお、顔覆の高い隊員の場合、顔覆のデザインなどが若干異なる。



→ 一般的な隊員が携帯するアサルトライフル。フルバップ方式ながら、電子化学照準装置とおぼしきものも装備されているため、機動性、命中精度の両面において優れた銃と推測される。



→ 突入時にはヘルメット、ゴーグルを着用。これ以外にも顔全体を覆うフェイスマスクも用意されていたとされており、BC兵器の使用を視野に入れていることが窺える。

追加報告

戦略自衛隊の活動

陸上、海上、航空自衛隊が国連軍へと編入される中、固有の軍事力が必要とした日本国政府が独自に設置した戦略自衛隊。通称「戦自」。政府国防省直属である戦自は独自の兵力を保有し、その技術開発のために「戦略自衛隊技術研究所（戦自研）」という研究機関を持っていた。さらにはBC兵器を所有するほか、未確認ではあるがBC兵器（生物兵器及び化学兵器）をももっていたと言われている。しかし、これらの兵力が政府独自の判断で活動したケースはほとんどなく、NERVへの侵攻を開始した際も、実質的にはゼーレの都合によって「動かされた」と考えるのが妥当であろう。



ガンマ作戦において用いられたボイドロスタナが、プログラムの欠陥と戦自研で開発されていた自主タイプのものに改修して作られた。



NERVへの侵攻時には、BC兵器も使用。対戦自隊は強化していたNERVにてこそ、その軍事情力に匹敵する術はEVAのみであった。

特記事項

J.A.の存在意義

対使徒採用の無人ロボットであるJ.A.。その建造を進めた日本重化学工業共同体は、NERVに関連する諸活動や、第3新東京市の建設に伴う列強から外れた企業との連携体だった。さらに実質的に建設を後押ししたのが、NERVの存在を快く思っていないかつて日本国政府と言われている。そのためか、J.A.の存在は対使徒戦を想定した「兵器」というよりも、対使徒戦艦のインシニアティブを避けた「道具」という意味合いが強かったようだが、しかし、J.A.はその公試運転の場で、NERVの結成工作に力懸注。建造に関わった人々も、結果的にこども貴族としての引きがされる形となった。



暴走するJ.A.。奇しくも赤木リツコが異議を唱えていた数々の「自走兵器としての問題点」が浮き彫りとなった。



工作が予定通りに進んだと報告するリツコ。かくして、使徒に對抗し得るのはEVAのみ」という面々が色濃く残った。

関連事項	詳細
日本重化学工業共同体	日本国内を拠点とするさまざまな企業の連合体。2009年にプロジェクトを立ち上げ、人型自走兵器J.A.を建造した。
戦略自衛隊	
日本国政府	